小舟なれば、木のはの如くゆらめきて、座すべくもあらず、僕はとく病臥しぬ、予も急流の目ざましきにいと珍敷おもひて眺め居たりしが、あまりに強くゆられて、心地も常ならねば、面目風景も眺つくさず、辛うじて渡り付ぬ、誠に潮の流るゝ事もすさまじきものなり、又此渡りの中流に、岩山の長きが一ッ水の上纔に出たり、是を與次兵衛瀬といふ、通船恐るゝ瀬なり、いかなるゆへに名付しやと問ふに、太閤秀吉公朝鮮御征伐の時、肥前の名古やまで御出陣ありしに、此海をわたり玉ふとて、汐先に押ながされ、御座ぶね此瀬に流かゝり、すでに碎けて海中に沈んとせし所を、四方よりたすけ船馳來り助け乘奉り、無難に渡り付給ひしとぞ、其時の船頭を與次兵衛といひしが、大かたならぬ不調法なれば、即時に此瀬に上り、切ふくして失たり、其後此瀬を與次兵衛とは名付しなり、太閤の御座船さえ流れたりし事、其汐先の強きを玄るべし、

〔萬葉集三雜歌〕又長田王作歌一首

隼人乃薩摩乃迫門乎雲居奈須遠毛吾者今日見鶴鳴、

〔東遊雜記十三〕三馬屋浦にて浦人を招き、松前渡海の里數を尋ね聞に、皆々海上七里といふ、予遠見せるに信じがたく、〇中略町端に手習師匠せし若ものに佐兵衛といふ人有、此もの萬事に才有よしを聞て、其儘尋行て、海邊の地理を尋見しに、所不相應の才子たりしゆへ、大に嬉しく、海上の汐の行事をも委しく聞し事なり、〇中略三馬屋より龍飛鼻迄三十六丁道にして三里に近し、龍飛鼻より白神鼻迄七里、然ば松前の津までは十里に少し近し、右のごとくわづかなる海上といへども、西の方數千里の大海より、東海へ行汐汐にて、其急なる事瀧の水のごとし、海上に三ッの難所あり、所謂龍飛の汐、中の汐、玄ら神の汐と稱し、龍飛の汐といふは、汐の流れ龍飛の岩石に行當り、其はね先至て強く、汐行一段高し、中の汐といふは、龍飛鼻よりはけ出す汐さきと、白神鼻よりはけ出す汐先と、中にて戰ふゆへに、逆浪立あがりて、時として定かならず、此汐行汐位不案内に